

# 砂時計の白き閃光

弓風

傭兵とは金や自身の目的の為に手を汚し、裏切りや護衛を受け持ち、いざとなれば使い捨てられる。そのような者が大半だ。

しかし例外的な傭兵も存在した。

彼女は産まれた時から例外に含まれた優秀な傭兵であった。

皆の誇りや希望に満ちたレースは手段の一つであり、それ以上でもそれ以下でもなかった。

彼女は依頼人から受けた最初で最後の曖昧な依頼を果たすのみ。

この小説はウマ娘プリティードービー公式の二次創作ガイドラインを熟読した上で作成しております。

本作品は原作や競走馬のイメージを損なわせる気は一切無く、内容に注意して作成しております。

物語の都合上、どうしても過激な表現が含まれてしまう箇所が出てきますので、どうかご了承いただければと存じます。

感想を頂ければ作者のやる気が上がりますので、頂ければ幸いです。



# 目次

イレギュラー	1
スピカへようこそ	19
メイクデビュー	35



## イレギュラー

薄暗く埃っぽい小さな建物の中に俺達は居た。

酷く傷み歪む椅子に座る俺の隣で、表情は気高いものの恐怖で震えるマックイーンと、マックイーンを落ち着かせようとするゴルシを含め、俺達の予想だにしない世界、常識、風景がそこに流れていた。

外では爆風は新たな爆発に覆われ、銃声はより大きな砲声にかき消される。

俺だつて恐い、意思に反して足が震えている。しかし、怖気づく訳に行かない。俺達は望んでこの紛争地域に赴いた。目の前で銃を持ちながら俺達の護衛を受け持つ傭兵に彼女の詳しい話を聞くために……

「ここは他よりは比較的安全だ。だが、命の補償は出来ない。」

そう言つて傭兵は振り返り、俺へ鋭い視線を向け呆れたように発言した。

「沖野トレーナー、日本から遠く離れた危険で辺境な地に何の用事だ？ 君達はレスで人々に希望を魅せる為の貴重な人材だ、ここに来るべき存在ではない。」

「レイレナードの亡霊さん。俺……いや、俺達は彼女の話の聞きに来ました。」

俺達が知りたかったのは彼女の事だ。

短い間とは言え、日本だけでなく世界中に一生忘れない夢や目標を教え、苦楽を共にした彼女の事を。

「それ程に無念だったのか？・・・なるほど、平和な場所であろうと狂気の眼を  
持つ者は現れるという事か。良いだろう。ホワイトグリントについて、俺の答えら  
れる範囲で答えよう。」

ホワイトグリント、傭兵の口から発せられた彼女の名前を聞き、ふと三年前の出  
来事が頭を過ぎった。

—————

「もう耐えられませんか！」

「トレーナーなのに、何もしてくれないじゃないですか！」

「この前にお伝えした通り、辞めさせて貰いますね！」

目の前に立つ怒り心頭のウマ娘達はそう叫ぶと、チームルームのドアを開けて  
さっさと部屋を出ようとすする。

「待て！話を・・・」

俺は咄嗟に声を上げて引き止めようとしたが、最後の一人が外に出た途端、ドアが乱雑に閉められ大きな音を鳴らす。

片手を中途半端に伸ばした体勢の中、部屋は先程の騒乱が過ぎ去り静寂が訪れた。

「はあ。」

俺は近くの椅子に座り、大きなため息をつく。

一体俺は何処で間違えたんだ？

今までの放任主義ではなく、リギルのように事細かく管理する方が今の時代に合っているのか？

弱気になった俺の心には一瞬そんな考えが浮かぶが、直ぐに違うと否定した。

いや、走り方を含めて本人が満足できないレースの方がよっぽど駄目だ。

それにまだコイツが残ってる時点で、俺の教育方針は大外れてるわけではないだろう。

「よう、オセロするか？」

「そうだな。」

三人がスピカを辞めた中、唯一残ってくれた銀髪が光るウマ娘。

少々・・・相当破天荒であるものの、やる時はやる。そう言う奴だからこそ、まだ希望は持つ事ができた。

だが、少しばかりメンタルが参っているのも事実である為、気分転換がてらゴルシのオセロに付き合おうと席を移動する。

「ゴルシ、少しは手加減してくれよ。俺じゃお前に勝てないの分かっているだろう？」

「ほおーん？何でも全力全開のゴルシちゃんに手加減を求めるとは、中々いい度胸しているじゃん！」

「ハハッ、どの口が言ってるんだか？」

こうして始めたオセロは、ゴルシが唐突にゴルゴル星に帰ると発言して窓を飛び出すまで続いた。

先に伝えて置くが、案の定オセロの結果はボロボロだと言っておこう。

勝てないの端から分かっちゃいるが、毎回一色にされるのは割と堪えるんだぞ！

口に出せば間違いないじられるのが目に見えるから、心の中で文句を言いながらオセロを片付ける。

ゴルシが居なくなり本格的に静寂が流れる中、次の打つ手を考える。

所屬が一人ではチームスピカの存続は不可能とすれば、新しいウマ娘をスカウトするしかない。

若干猶予がある間に広告を打っておき、後はスカウトで地道に進めるしかないか。

スカウトならば模擬レースを観に行くのが一番・・・か。

確か次の模擬レースは何時か確認しねえと。

などと、今後に行く予定を考えていると突如ドアが開かれ、反射にドアに視線を向ける。

「ゴルシが戻って来たのかと頭を過ぎったが、そこに立つ女性を見て間違いと気づいた。」

「おやおや、珍しいお客さんではありませんか。」

「スピカが解散の危機だって小耳に挟んだのよ。沖野相手に言いたくないけど、競争相手が居なくなれば貴重な目標が減るのは好ましくないだけ。」

呆れた様子で立つのは、トレセン学園内最強のチームであるリギルのトレーナーであるおハナさんだった。

ウマ娘を細かく管理し、厳しく指導するおハナさんは実績もあって近寄りがたい雰囲気を持つが、実は物凄く面倒見の良い人物である。

俺はおハナさんと長い付き合いがあるからこそ、言葉の裏側を理解して嬉しく感じていた。

「ほお、最強と名高いリギルのおハナさんにそう言っていただけなんて、嬉しくて涙が出ちゃいますね。」

「嘘泣きをしている暇があるなら、さっさと用意して。今日の模擬レースが始まるまで時間は無いの。」

おハナさんから模擬レースの話聞き、大慌てでストップウォッチやメモを用意する。

そして用意している間、唐突におハナさんからスカウトとは別の目的を告げられた。

「そうだわ。今日の模擬レースは少し観客が多いかも知れないわね。」

「今年は才能のあるウマ娘が多いと聞くから、その影響ですか？」

「確かにその通りだけど、もう一つあるわ。特異的な走りをするイレギュラーの噂

くらいは知っているでしょう？」

「イレギュラー？」

俺は作業を止め、イレギュラーと言う単語が入った出来事を思い浮かべる。

そういや、ゴルシが練習中にこの前何か言っていたような。

なんだっけ？内容は覚えていないが、凄い走り方をするウマ娘としか覚えていない。

「まあ噂が嘘か真かなんて、実際に見てみれば分かる事だけだ。」

と言う事で、模擬レースが開催される学園内のバ場へ向かう。

観客席は他のトレーナーや模擬レースを観戦しに家族連れが集まっていた。

確かにいつもに比べると多いな。

俺の見た範囲に普段あまり顔を出さないトレーナーの姿もチラホラ見受けられた。

思ったより注目度が高いと再認識しつつ、レースを一望出来る一角の席を確保する。

「例のイレギュラーの出るレースは第5レースよ。」

「んじゃ、それまで見込みのあるウマ娘を探すとしますかねえ。」

そう言って、目の前で行われているレースを観戦する。

日本の優秀なウマ娘が集まる中央トレセン学園なだけあって、まだまだ荒いものの、何かしら才能の欠片を魅せるウマ娘しかレースに出ていなかった。

しかしそれでも、公式レースに出られるのはトレーナーと契約したほんの一握り、相変わらず世知辛い職業であるともたまには思う。

そして遂に目的のイレギュラーと呼ばれるウマ娘が出場するレースがまもなく始まる。

ゲートの前で数人のウマ娘が準備体操や瞑想でそれぞれがレースへ向け準備をしていた。

「例のウマ娘はどの娘ですか？」

「確か、9番のゼッケンを付けているウマ娘よ。・・・あの長い銀髪の娘がそうね。」

スタート地点に立つ、唯一銀髪のウマ娘へ視線を向ける。

・・・不思議な立ち姿だな。

例のイレギュラーは足を軽く広げ、腕は伸ばしきらず少し曲げて立っている。

そして俯いていた顔を上げて顔が見えるようになった時、俺は直感的に感じ取る。コイツは本物だ、強い。

立ち方は変だが、雰囲気からして他のウマ娘とは違う。

俺は視線をイレギュラーから離せず見つめていると、各ウマ娘がゲートへ入る。イレギュラーへ意識が向けられていた為、ストップウォッチの準備をしていなかったと気付き、少し慌てる。

そしてゲートが音を立てて開き、レースが開始された。

「早いっ！」

その言葉を発したのは俺だったか、おハナさんだったかそれとも他人だったのだろうか。

ゲートが開かれ、最初に飛び出してきたのは銀髪を靡かせたイレギュラーだった。

スタートダッシュの加速力・・・いや、瞬発力が異常だ！

スタート直後でありながら、既に先頭と2位との間は3バ身は離れている。

そして瞬間的に末脚を使うような独特の加速を交互に繰り返し、スピードが常に

上がり続ける。

レースの半分の1000mを通過した時には既に周りとの圧倒的なバ身が表れていた。

外から見れば破滅的な大逃げ、その一言だった。

周りとの実力差があるからかも知れないが、前のレースで見たリギル所属のサイレンススズカの逃げにすら匹敵するように感じる。

だがあんな無茶苦茶な走りをしていれば、いずれスタミナが尽きるはずだ。

スタミナの消費が激しい逃げに加え、既に末脚を何度も使用している観点から、常識的に考えて思い込んでいた。

「おいおい嘘だろ！まだ加速するのかよ！」

イレギュラーが最終コーナーを越え、直線に入りながらも加速し続ける状態に思わず俺がそう叫んだ。

ただでさえ大量のスタミナを使用する大逃げをする入学したばかりのウマ娘が、レースで一度も減速せず、常に加速し続けるなんて考えていなかった。

ゴールを越え、判定は堂々の一位、それを疑う者は誰も居なかった。

観客席からイレギュラーに向けて家族連れの一般人から歓声を送られるが、ウマ娘に詳しい者やトレーナーは皆、呆気を取られて数秒間動きが止まっていた。

「・・・不意を突かれたとは事かしら。想像以上ね。」

おハナさんが珍しく呆けて眩き、俺はストップウォッチのタイムへ目を向ける。

「独走状態で何一つ駆け引きが無かったとは言え、このタイム。G1ですか？」

手に持つストップウォッチの数値は、模擬レースはおろかG1のタイムと言われ  
ても不思議ではなかった。

とんでもないウマ娘が現れたと思った同時に、ソイツを俺の手で育てられないこ  
とを残念に思う。

「羨ましいぜ。あんな有望なウマ娘を育てられるなんてねえ、おハナさん。」

基本的に最も強いウマ娘は学園随一の實力を持つチームリギルへ向かう。

もはや恒例行事であった。

クラシック三冠馬のシンボリルドルフの時もそうであった以上、俺はそう考えて  
いたが、次のおハナさんの言葉で呆気を取られた。

「あら？勘違いしているようだけど、私はあのウマ娘のトレーナーでないわよ。」

「えっ？これはどう言う？」

「あの娘、今まで一度もリギルの選抜レースに來た事が無いのよ。」

「それってつまり、リギルに興味が無いって事か？」

てつきり、あの馬鹿げた才能を持つウマ娘の所属は、最強のリギルと思い込んでいた。

しかしおハナさんから違うと否定された以上、嘘でないだろう。

とすると、何故選ばないかと不思議に感じるのは必然だった。

うーむ。目の前の模擬レースで圧倒的強さを証明している以上、リギルの選抜レースに出走すれば間違いなくOK、むしろリギルから囲い込みに来るはずだ。

リギルに拒否する理由が無い以上、ウマ娘の方がリギルに行かない理由がある。

トレーニング効率、サポートの手厚さ共にリギルがトップである以上、それ以外の要因。

知名度的にリギルを知らない訳がないから、リギルだけが持つ特徴とすれば・・・

「あの娘は管理されるのを嫌っているとか、か？」

「直接彼女に聴いたわけではないけど、恐らくそうでしょうね。」

何処か達観したようにおハナさんは告げる。

トレセン学園内外問わず、細かな管理を嫌がるウマ娘は決して少なくない。現にクラシック三冠ウマ娘のミスターシービーだってそうだった。

「おハナさん。彼女の名前は？」

「ホワイトグリントよ。」

「・・・ホワイトグリント。白き閃光、か。」

バ場に立つ彼女は、アルビノと思ってしまう程の白い肌に、遠目から分かる艶のある銀髪、そして先程の圧倒的速さ。白き閃光の名に相応しいだろう。

「もし彼女がトレーナーを選ぶなら、管理主義のリギルよりスピカの方が合っとうね。もし合っとうればだけど。」

メモ帳から俺へ視線をずらしたおハナは淡々と口にする。

「彼女をスカウトするなら急いだ方が良いわよ。狙うトレーナーは多いわ。」

「分かっているぜ、おハナさん。」

もし管理を嫌がる予想があっとうれば、放任主義のスピカが合うのはほぼ間違いないだろう。

だとすれば、一世一代のチャンスを見逃すつもりはない。

おハナさんに一言伝えて、ホワイトグリーントをスカウトしに探しに行く。

しかしバ場の控室やその周囲を他のトレーナーを含めて搜索するが、ホワイトグリーントの姿は何処にも見えなかった。

疑問に思った俺は近くのウマ娘に確認したところ、既に外に出たと言われ、俺はひとまず近くの植木の傍で休憩して考えていた。

あのレースから15分は経っている状態だ。

既にスカウトされたのか？ いや、周りを見れば誰かを探し回っているトレーナーの姿がチラホラ見える。

探し回る全員がホワイトグリーント目当てではないだろうが、決して数は少なくなはず。

まだ探し回っている時点でまだ可能性ある。

時間からしてバ場からはそう離れていないはずだが、トレーナーが複数人居ても未だ発見出来てない。とすれば、まだバ場に居るのか？

間違っているかも知れないが、消去法で残った観客席に居る可能性に掛けて、足

を動かす。

そして観客席に着いて見回している時に、通路で立っているウマ娘が目に入った。運動服の上にパーカーを着ており、フードを被っていて顔は分からないが、半パ  
ンでむき出しになっていた太ももを確認した瞬間に確信した。

っ！居たぞ！

俺はそのウマ娘を後ろから近づき、しゃがんで脚を触る。

「コイツは驚いた・・・！」

ウマ娘は人間と比べて大きく筋肉が成長している。

だが、この脚は特に速筋の発達具合が異常だ。他のウマ娘の比じゃない。レース  
で見た瞬間的な末脚が可能な要因はこれか。

しかし、なんだ？普通の筋肉とは違う何か別の感触が紛れている。

初めて感じた謎の感触が気になり、更に太ももを触っているものの正体が掴めな  
かった。

その時、ウマ娘が振り返ろうとゆっくり脚を動かした為、太ももから手を離して  
視線を上に向ける。

よし、予想とおりだ。

「チームスピカのトレーナー、沖野だ。君をスカウトしに来た。俺と一緒に夢を叶えてみないか？」

「・・・チームの教育方針は？」

「まあ、言ってしまうえば放任主義だな。本人が望む走りでも1位を獲得出来るように手助けをする、簡単に言えばそんな感じだ。」

「・・・条件付きで良ければ所属、で如何ですか？」

数秒の間を置いて、ホワイトプリントから提示された。

ウマ娘側から条件が付く事は対して珍しい事ではない。

クラシック三冠を狙いたい、トリプルティアアラが欲しい、日本一のウマ娘なりた  
いなど、不可能と思える条件でも本人の望む未来を手に入れる手伝いをするのがト  
レーナーだからな。

「分かった。その条件は？」

俺は笑顔で聞いてみたが、直ぐに表情が変わってしまった。

彼女の口から発せられた、今まで聞いた事も考えた事の無い複数の条件に俺は動

揺  
し  
て  
し  
ま  
っ  
た  
か  
ら  
だ  
。



## スピカへようこそ

ウマ娘の名称は、会話であだ名が出るまではフルネームで行かせて頂きます。

「よろしく願いますっ!!」

太陽が昇りきる寸前の昼前、トレセン学園内に位置するチームスピカのルーム内で、スペシャルウィークは元氣よく返事をした。

「よし、これでチームもピツタリ五人で安心ね。」

「こいつは入部のプレゼントだぁ！ボーリング場でも使えるくらいツルツルだぜ。」  
ダイワスカーレットが笑顔で答え、隣のゴールドシップが入部のプレゼントとして、手のひらサイズの木彫りの熊をスペシャルウィークに渡す。

受け取ったスペシャルウィークは、表面が反射する位研磨された謎の作品に、感触の良さよりも疑問が浮かんだせいで困惑しながら受け取る。

それを見て、サイレンススズカやウオッカは軽く笑い、チームルーム内は賑やか

な雰囲気に包まれていた。

「ああ、約束通り五人集めたぞ。・・・そうか、チームルームの場所は分かるな。」  
いつの間にか片隅で電話を掛けながらニヤける沖野トレーナーに、全員の視線が集中し、電話を収めたタイミングでダイワスカーレットが声を掛けた。

「そんなニヤニヤして、一体何処に連絡しているのよ。」

「ああ、実はあと二人チーム入りが確定しているんだ。近場に居るから直ぐに来るぞ。」

更にチームの人数が増える事に全員が驚愕、特にスペシャルウィークは新しく友達が増えると思い、より歓喜の笑顔を表に出す。

「うう、先日まで一人ぼっちのチームだったのが賑やかになってゴルシちゃん嬉しいよ。流石私の息子だねえ。」

「おいまで！ゴルシの息子になった覚えはないぞ！」

嘘泣きするゴールドシップと沖野トレーナーが漫才をやっている時に、入口が音を立てて開き、全員の意識が入口へ向かった。

入口で軽く腕を組んだ状態で立っていたのは、栗毛のショートヘアをしたウマ娘

だった。

「ちよつと失礼するよ。連絡を受けたアグネスタキオンだ。よろしく頼むよ。」

「たつタキオンさん！」

予想外の人物にダイワスカーレットは声を張り上げ、一方のアグネスタキオンも少し驚いた様子を示した後、何処か怪しい笑顔を向けた。

そして親しげにダイワスカーレットに声を掛ける。

「やあやあスカーレット君、これから宜しく頼むよ。この前の栄養サブリはどうだい？」

「おかげ体調も凄くいい感じですよ。流石タキオンさんですね！」

「アハハ、照れるじゃないか。」

スカーレットの曇り無い本心からの褒め言葉に、案外満更なでもなさげにタキオンは回答するが、耳や尻尾は機嫌が良さげに揺れていた。

「おっと、そうだとトレーナー君。お目当ての彼女もちゃんと来ているよ。」

タキオンが横に動き、後ろで影に隠れていたジャージ姿の小さなウマ娘が姿を表し挨拶する。

「これからお世話になります、ホワイトグリントです。宜しくお願いいたします。」  
「あっ！教室で聞いた名前。」

休憩時間中の教室で、エルコンドルパサーからテスト中以外教室に居ない謎のウマ娘と聞いた名前だと、スペシャルウィークはふと思いついていた。

「すっげえー！噂のイレギュラーじゃん!?おいトレーナー、どうやって脅したんだ？」

一方前半の驚愕が完全に消え去り、クツソ真面目な顔つきでゴールドシップが沖野トレーナーの襟を掴み尋問しようとするが、沖野トレーナーは慌てて即座に否定した。

「脅してねえ！条件付きだが、ちゃんと了承は取ってるぞ。」

「おーよかったよかった。危うくトレーナーをペルシャ湾のブイにするとところだったぜ！」

「人を海の藻屑にするなよなあ。」

掴まれてヨレヨレになった襟を直し、沖野トレーナーはホワイトグリントへ声を掛ける。

「ホワイトグリント、急だが一週間後にメイクデビューの予定を入れるつもりだ。行けるな？」

「はい。異論はありません、受諾します。」

あまりに日程が近いメイクデビュー発表に、沖野トレーナーの横に立つスカレットとウォッカが聞いただそうとしたが、それよりも早くホワイトグリントの了承を得た為、出鼻を挫かれた二人は黙認する事に決めた。

ホワイトグリントの回答に一瞬笑みを浮かべた沖野トレーナーは、スペシャルウィークへ真剣な表情で発言した。

「それで次にスペシャルウィーク、お前に聞きたい。メイクデビューに進むに当たって選択肢が二つ存在する。」

「えっと、二つ？」

「そうだ。」

沖野トレーナーが指を二本立て簡潔に説明する。

「ホワイトグリントのメイクデビューと合わせるか、若干日にちをズラして別のレースに出るかだ。」

スペシャルウィークは転入してばかりとは言え、重賞のレースに出るにはメイクデビュー、未勝利戦を一位で突破する必要があるのは知っていた。

つまり、同じレースに出ればホワイトグリンとスペシャルウィークのどちらがしか先に進めないと言う意味でもあった。

「えっと・・・その、ホワイトグリンとさんは強いんですか。」

「時期を考えれば正直強すぎると言っている。それがイレギュラーと呼ばれていた所以だ。現状のスペシャルウィークだと、ほぼ間違いなく一位は取れないものと考えて欲しい。」

スペシャルウィークはホワイトグリンとへ視線を動かし、他のウマ娘も同じく視線を集めた。

他のウマ娘なら動揺しそうな視線が集中しても平然としているホワイトグリンの姿は、何故か場数を踏んだウマ娘と同じ雰囲気を感じさせ、沖野トリーナーの言う通り、勝てる見込みがないように思ってしまう。

誰だって負けたくないと言う思いはあり、敗北の苦い味は嫌がる。

それは転入したばかりのスペシャルウィークとて同じだった。

メイクデビューをズラせば、敗北は味わなくても済むかもしれない誘惑が手を差し出す。

しかし彼女は意を決して、沖野トレーナーへ向け一直線に見据えた。

「私、一緒に出たいです！」

「茨の道だ、勝つ見込みは殆ど存在しない。レースの実力差に絶望するかも知れないぞ。」

「それでも！日本一のウマ娘になる為には必要な事だと思うので、お願いしますっ！！」

今まで愛情一杯に育ててくれたお母ちゃんとの約束を守る為に、逃げる意思はスペシャルウィークに存在しなかった。

「そこまで言うなら分かった。同じくメイクデビューの出走登録はしておく。あと、午後からトレーニングだぞ。他の全員もだ。」

「おっと、ホワイトグリント君は計測があるから少し残ってくれたまえ。」

ここでホワイトグリントとタキオン以外は昼食で解散し、その間、ホワイトグリントは手足に計測器を付けられた状態でいくつか指示を出され、実際に軽く運動を

行った後、ホワイトグリントはカフェテリアへと向かった。

一方、チームルームで計測器からの数値を期待していたタキオンは、パソコンに表示された予想外の自体に頭を抱えていた。

「アグネスタキオン、何を悩んでいるんだ？」

「私はタキオンで構わないよ。それでこれさ。」

出走書類を作成していた沖野トレーナーが流石に見かねて話を振ると、タキオンはパソコンの画面を見せてくる。

画面のデータは先程ホワイトグリントの走った心拍数や呼吸回数などが記録されてデータだが、沖野トレーナーは一目見て頭を抱える理由を理解した。

「なんだこれ。データの欠落やら数値の上がり下がりが乖離し過ぎだろう。計測器が壊れていたのか？」

「そう思って調べてみたけど、計測器自体は何処も壊れてなかった。このパソコンも同様だね。」

「うーむ。データが欠落している以上、俺としては計測器の壊れたとした考えられないな。」

ホワイトグリントに取り付けた計測器がパソコンへデータを送信しきれてない時点で、どう考えても機械的の故障としか沖野トレーナーは思い浮かばなかった。

最終的にタキオンは別の計測器を用いて、午後にもう一度測定を行うと言う事で方向で一旦の解決策は決定した。

そして午後予定のトレーニングは、タキオンとホワイトグリント、沖野トレーナーとその他全員に分かれて行っていた。

ホワイトグリントがバ場を周回している中、沖野トレーナー側で一番トレーニングのやる気があったスペシャルウィークが行ったトレーニングは……

「次、右手青。」

目の前に見えた青い丸に右手を震えさせながら、ウオッカの体の隙間を突きながらスペシャルウィークは手を伸ばす。

「おお、良いぞスペシャルウィーク。その調子だ。」

「何・・・この・・・トレーニングッ！」

スペシャルウィークがそう呟くのも当然であった。

なにせバ場のど真ん中でやっていたのはツイスターゲームだったからだ。

「これ、意味無いんじゃないの？」

内心呆れていたダイワスカーレットはジト目で沖野トレーナーに言うが、自信満々に回答する。

「意味はある！」

「じゃあ説明しろよおー！」

沖野トレーナーの返答にウオッカが納得がいかず、声を張り上げて抗議する。

「たく、しょうがねえな。ツイスターゲームは体幹を鍛えるのにちょうどいいんだ。まだまだお前達には土台が足りないんだよ。」

「だったらグrint先輩もやる必要があるんじゃないのかよおー！」

「ホワイトグrintには必要無い。QBを行えるだけの体幹があるからな。そこらのウマ娘よりかなり上だぞ。」

突然出てきた未知の単語に、スカーレットが疑問に感じて、スペシャルウィークとウオッカから視線を逸らして顔を上げる。

「QBって何なの？」

「ホワイトグrint本人がQB（クイックブースト）と呼んでいる瞬間的な末脚の事

だ。ほれ、あれを見てみる。」

バ場を周回し、QBを使用してこちらへ向かってくるホワイトグリントに沖野トレーナーが指を指し、スカーレットとゴールドシップが観察する。

近くまで走り続け、沖野トレーナーの後方を通り過ぎてホワイトグリントが走り去って行った。

「相変わらずホワイトグリントは、奇妙なフォームで変な加速をしてんな。」

「それはゴルシに同感だ。」

走り去るホワイトグリントにゴールドシップが感じた感想を口に出し、沖野トレーナーも横目で確認した後、賛同する。

横から見て上腕を腰より後ろに決して下げない独特なフォームは、世界を探してもホワイトグリントのみだろう。

腕と脚の動きは連動している為、速く走る場合にはしっかりと腕振りが必要であるはずだが、そんな事情は関係ないとばかりに洗礼されていた。

「よくあんなフォームで走れるわね。トレーナーは変えさせたりしないの?」

「一応言ってみたが断られた。詳しく聞いてないが、どうにも理由があるらしい。」

「ふうん。」

「も、もお無理い・・・」

呑気に話をしている間、無理な体勢を長時間続けたせいとか、体力が尽きてスペシャルウィーク、ウオッカがシートの上に倒れ込む。

「よし、次はスカーレットとゴルシだ。」

「フフツ、まあ良いわ。例えゲームでも私が一番なんだから！」

「おうおう、このゴルシちゃんにゲームで勝とうなんて、564年早いぜ！」

負けん気を出すスカーレットにゲーム最強のゴールドシップがノリノリで行い、数回交代した後、今日のトレーニングは終える。

そしてチームルームに戻った沖野トレーナーは、部屋に明かりが付いている事に疑問を抱きながらもドアに手を掛けた。

「おっ？やあやあトレーナー君！ちよつと来たまえ！」

チームルームの扉を開けた沖野トレーナーを、興奮気味のタキオンが早く来いとばかりに手で指示をする。

複数の計測器が散らばった状態の机へ、近場の椅子を置いてタキオンの隣に座る。

「そんなに興奮してどうしたタキオン？」

「無事にホワイトグリント君のデータが取れたのさ。」

昼前に困っていた内容が解決した事はよかったが、そこまで興奮するものかと沖野トレーナーは疑問に思っていた。

しかしタキオンは生徒でありながら立派な研究者であり、何か参考になる数値でも取れたのかと考えていた。

「そりゃあ良かったな。それで何かしら面白い結果でもあったのか？」

「ああそれは勿論！こんな事例は世界で最初かもしれない。これを観たまえ。」

パソコン画面が半分に別れ、左が折れ線グラフ、右がホワイトグリントの走る映像だった。

ホワイトグリントが走る間、グラフが微妙に上下し、本人がQBと呼ぶ瞬間的な末脚を行った時のみ、グラフが大きく上昇した。

「何のグラフ分かるかい？」

「そりゃあ、脚に掛かる負荷とかだろ。」

「残念、不正解。答えは電磁波の強度さ。」

沖野トレーナーは呆気を取られ、口の中に含んでいた棒付き飴が床に落ちる。

「ハツ電磁波？負荷とかじゃなくて電磁波の強さなのか？これ？」

「そうさ。」

ウマ娘と電磁波の因果関係が全く分からない沖野トレーナーは、一瞬脳が理解を止めたが、その後直ぐに我に返ってタキオンの話を聞く。

「私もあり得ないと考えながらもホワイトグリンツ君に電波計測器を付けてみれば、常に体内から電磁波が発生していると来た。それに電磁波の強度は運動の強度に比例している。」

「まるで意味が分からん。電磁波を発するウマ娘なんて、長年トレーナーをしてきたが始めてだぞ。」

沖野トレーナーの発言を当たり前とばかりにタキオンも肯定する。

「当たり前さ。私もウマ娘はおろか人間でもそんな事例は無い。筋肉や神経伝達の体内電流が存在するが、それとは比較にならない桁違い出力だからね。一回目の計測が失敗するはずだよ。計測器の電波が電磁波で妨害されたらメチャクチャになるのも頷ける。」

言葉は残念そうにしながらも、何処か楽しそうにタキオンは話す。

「彼女の強さの秘訣は電磁波だけでは無いだろうが、恐らく要因の一つだろう。面白いモルモットだよ。」

タキオンに全て賛同する訳ではなかったが、ただのウマ娘としての枠に入れていけないと直感的に沖野トレーナーも感じていた。



## メイクデビュー

朝日が昇って数時間経った午前10時頃のトレセン学園。

生徒の大半は授業に出席している中、外は鳥の鳴き声くらいしか聞こえない静かな雰囲気にも包まれていたスピカチームルーム内には、三人の人物がそれぞれの作業をしていた。

「そう言えばトレーナー君。スペシャルウィーク君とホワイトグリンツ君には、三日後のレースの指示はどうするつもりだい？」

パソコンで計測結果を元にシミュレーションを行っていたタキオンは、振り返って後ろで作業をしていた沖野トレーナーに声を掛ける。

すると沖野トレーナーは、記載中の書類から顔を上げ回答した。

「今回の指示は無しだ。」

「おお、それは随分と思いついた決断だね。」

「スペシャルウィークはレースの経験が足りないから指示通りに動けないだろうし、ホワイトグリンツに至っては俺の知識や見解が未熟だ。」

そう言つて、沖野トレーナーはタキオンの反対側の椅子に座り、レース場の資料と新聞を交互に確認していたウマ娘へ視線を動かす。

「何かと例外的な存在であると理解してます。」

今までの常識が通用しないウマ娘と自覚しているホワイトグリントは、資料から視線を逸らさず返答した。

「ではホワイトグリント君、君はどうやって勝つつもりだい？」

「秘匿しつつ必要最低限の労力で勝ちます。」

端的に答えたホワイトグリントの回答に、タキオンは抑えきれないように笑い声を出した。

そして目を細めてタキオンは答える。

「ハハッ、確かに君なら全力を出さなくてもメイクデビューは勝てるだろうね。周囲がどう思つか分からないだろうけど。」

「周囲がどう思おうとも関係ありません。ルールには違反していませんし、異論は実績を持って認めさせます。」

何の感情もなくバツサリ切り捨てて発言するホワイトグリントに、書類仕事をし

ていた沖野トレーナーは若干慌てて口を開いた。

「おいおいホワイトグリント、さっきの発言は一部からバッシングが来そうだから程々してくれよ。」

「必要無ければ話しません。」

これまで付き合いで、ある程度予想していたホワイトグリントの回答に肩を落とす沖野トレーナーを尻目に、タキオンは凶気を宿した視線で面白そうに話す。

「ふうん。どうにもホワイトグリント君は、私と似たレースに執着していない希少なウマ娘な感じがするねえ。」

「私やタキオンさん、他のウマ娘も本質は変わりません。自らの実力を示す為にレースという手段でトロフィーを狙うか、タキオンさんのように速さを追求する手段の一つがレースである、ではありませんか？」

資料と新聞を片付け、タキオンへ感情の無さそうな無表情を向きながら伝えるホワイトグリントに、タキオンもニヤッと口角を上げる。

その頃、ふと思いついた沖野トレーナーはホワイトグリントへ疑問を投げかけた。「つーかタキオンはまあ良いとしても、ホワイトグリント、授業はどうした？」

「テストで好成绩を収めておけば、授業に出なくても問題ありません。他にも条件はありますが、理事長には許可を取っています。」

「理事長に許可まで取って、随分と用意周到だな。」

「備えの必要性は身に染みていますから。では私は用事を終わらせて来ます。」

ホワイトグリン트가チームルームに備え付けの時計を一目確認した後、資料と新聞を片付けて立ち上がり、外に出るドアを開いたタイミングで沖野トレーナーへ振り返った。

「それと沖野トレーナー、明日は半日だけスペシャルウィークさんをお借りします。決して悪いようには致しません。」

「まあ、半日だけなら良いだろう。それと今日はスペシャルウィークにゲート練習をするからと伝えといてくれ。残りはタキオンに任せる。」

ホワイトグリン트는沖野トレーナーの了承を確認して、チームルームを後にした。そして当日の放課後。

スペシャルウィークとホワイトグリン트는練習用のゲート中に入り、ゲートが開く同時に意気よく飛び出し、20m先の三角コーンまで駆ける時間を測っていた。

「ホワイトグリントさん速過ぎますよお！」

既に何度もスタートの練習をしており、一度もホワイトグリントに勝っていないスペシャルウィークは、思わず口に出す。

「ほれ頑張れスペシャルウィーク。負けっぱなしは嫌だろ。」

沖野トレーナーはスペシャルウィークの負けず嫌いを煽るように言い放った。

「次は負けませんよお！」

すると案の定、意気揚々とゲートに入り、次のスタートを待つスペシャルウィーク。

ホワイトグリントも再びゲートに入ろうとした時、隣のコースから叫びながら光るウマ娘が走っていた。

「ヒヤッハー！不沈艦抜錨ッ!!」

何故か体が虹色に輝き、目からハイビームを放射しているゴールドシップは道行くウマ娘を照らしながら駆けていた。

「えっ、なんで光ってるんですか？」

「いやまあ、多分タキオンの仕業だろうが・・・あっエアグルーヴに照射しやがっ

たぞ、アイツ。」

呆気を取られたスペシャルウィークに対して、沖野トレーナーが予想を言うが正解である。

ちなみにエアグルーヴが居たのはただの偶然であり、ゴールドシップが間違っ  
て照射してしまったのは、自身の発する光で前が良く見えなかったからである。

フラッシュが嫌いなエアグルーヴに高光度の光を照射してしまえばどうなるか、  
火を見るより明らかであった。

「ゴォォールドシップウウツ!!」

「ぬああエアグルーヴだ?! 済まねえゴルシちゃんは華麗に去るぜっ!!」

完全にブチギレたエアグルーヴが全速力で追い掛け、ゴールドシップも隠れやり  
過ごそうとするが、遠目からでも分かる位光っている事により、直ぐに発見されて  
地獄の鬼ごっこが始まっていた。

「とりあえず、ゲート練習続けるか。」

「・・・そうですね。」

「はい。」

それでも何度かスタートの練習を繰り返した時、沖野トレーナーはある違和感に気がつく。

「んっ？ ホワイトグリント、一人でもう一回やってくれないか？」

「分かりました。」

一旦スペシャルウィークを休ませ、ホワイトグリントのスタートを注意深く観察する。

ゲートが開くと共に勢いよく飛び出したホワイトグリントを見て、沖野トレーナーはある弱点に気が付く。

三角コーンのところで待つホワイトグリントを近くまで呼び寄せ、ポケットから折り畳みの30cm定規を取り出した。

「ホワイトグリント、手を出せ。今からこの定規を落とすから、素早くキャッチしてくれ。」

「はい。」

沖野トレーナーは手持ちの定規を使い、定規落しで反応時間を計測しようとしていた。

そして沖野トレーナーが定規を離して落下し始めた瞬間、ホワイトグリントが掴もうと指を動かす。

そして現れた結果にスペシャルウィークは驚き、沖野トレーナーは納得したように頷く。

「えっ？」

「やっぱりなあ。」

ホワイトグリントが取るはずだった定規は、コースの芝の上に落下していた。

この結果は一つの結論を示していた。

それはスペシャルウィークも容易に想像がつく。単純にホワイトグリントは脊髄反射が遅く、定規を掴めなかったと。

「でも、どうして？ 私よりスタート早いですよね？」

ここまで反射が遅ければスタートも当然遅いと考えるスペシャルウィークに、沖野トレーナーが口頭で説明した。

「それは反応の遅さをQBの瞬発力で補っているからだ。他のウマ娘が加速する前に桁違いの瞬発力で速度が乗るからこそ、スタートが早くなるって事だ。しかし、

意外な弱点だな。」

脚質次第ではあるものの、出遅れが起こった場合にはその後が不利になる事が多く。

差しや追い込みならある程度リカバリーは効くが、逃げの時は先頭を取りに行く都合上、致命傷になりかねなかった。

映像資料が表に出ていない現状は気付かれていないが、一度レースに出走してしまえば、後日スタートの瞬間をスロー再生されれば直ぐに気付かれるだろう。

特に情報の分析が得意なチームリギルのおハナさんが見逃す訳が無いと理解していた。

それにここまで反応が鈍いと別の意味でマズイことも分かっていた。

しかし現状では対応する時間が限られているからこそ、敢えて切り捨てる判断で進めようと沖野トレーナーは考えていた。

「今日やるだけやるぞ。もう一回だ！」

そうして一つ一つ気になる点を時間が許す限り、着々とレースに向け準備を進めて三日後のレース当日。

観客席には多数のファンや新しく有望なウマ娘を見つけようと、足を運ぶ人達で席は埋まっていた。

『雲一つ無い晴天、絶好のレース日和になりました。芝、距離1600m、良バ場の発表です。今日のレース、優勝するのはどのウマ娘なのか？期待が高まりますね。』

各所のスピーカで放送が流れるレース場で観客席よりも前に位置する小さな部屋に、チームスピカの面々が集まっていた。

「準備完了です、タキオンさん！」

「ありがとうスカレット君。トレナー君は終わったかい？」

「こっちも機器のセット終わったぞ。」

設置型のカメラと周辺機器の据付が終わった後、タキオンは試運転を行って異常が無いと確認する。

「いやあしかし、ここが借りれて良かったよ。測定器を観客席に置く訳にも行かないからねえ。」

何時でも起動出来るようにするタキオンの後方で、スカレットが沖野トレー

ナーの方を振り向く。

「それにしてもトレーナー、よくここが借りれたわね。」

「これでも中央のトレーナー歴はそこそ長いからな。伝手はあるんだよ。それはそうとゴルシ、その山の様なテルテル坊主は何だ？」

スカレットの質問に回答しつつ、沖野トレーナーはゴールドシップが抱える透明な袋に嫌な予感を感じて声を掛ける。

一方質問を受けたゴールドシップはニツカリと笑って堂々と発言した。

「突然の雨にならないように作ったテルテル坊主だぜ！」

ゴールドシップはこう言っているが、外は快晴、雨を降らす雲一つ存在しない状況である。

「いや、どっからどう見ても快晴だろうが、片付けが増えるから車に閉まってろ。」  
「ちえ、折角ゴルシちゃんがトレーニング時間に作ったのになあ。」

笑顔から一転して耳や尻尾が力なく倒れ、しょぼくれた表情で袋を持ちながら車へＵターンして帰って行った。

沖野トレーナーの隣で二人の光景を見ていたウオッカが苦笑しつつ、今日のレ-

ス前パドックの様子を思い浮かべていた。

「にしてもスベ先輩、パドックはちゃんと出来て一安心だぜ。」

初めて公式レースに出場する事に加え、人の少ない田舎から来た事情も合わさって、パドックの場面では歩く際に手と脚を同時に出したり、緊張で強張った面持ちではあったものの、それ以外は特に問題なく完遂していた。

「俺はすっかりパドックの見せ方を教えるの忘れていたから助かったぞ。気になってちよいとスペシャルウィークに聞いてみたら、ホワイトグリントから教わったらしい。この前、スペシャルウィークを借りた理由を理解したぞ。」

「それはそうと、グリント先輩は・・・あれって問題無いのか？」

「ルールには反していないからどうにも言えないなあ。」

特に問題なく終わったスペシャルウィークと異なり、ホワイトグリントのパドックは若干波乱が巻き起こった。

「まさか上下ジャージ姿で来るとか想定外にも程がある。」

G2以下の公式レースの場合、個人の体操服で出走する事になる。

基本的には走りやすさや身体の状態を確認しやすくする為に半袖半パンもしくは

ブルマで行うが、ホワイトグリントは上下長袖のジャージで出走すると言う過去に事例の無い方法でレースに赴いていた。

そんな奇想天外な出来事もあり、人気投票では14番人気と最下位でもあった。仕上がりが分からない状況では当然の結果であったが、沖野トレーナーとタキオンからすれば、ホワイトグリントの実力を持ってすれば、間違いなく大番狂わせが起ころうと確信していた。

「あのおタキオンさん。グリント先輩ほどのくらい速いんですか？」  
レース前に何気なく質問したスカレットに、タキオンは難しそうに悩んで答えた。

「彼女は色々と特殊な体質をしているから説明が難しい。的確ではないかも知れないが、ステイヤーのスタミナを持つスプリンターと言えば分かりやすいだろう。」  
「ええ・・・こんなに矛盾した一言は初めて聞きましたよ。」

少しでもレースを知っている者からすれば有り得ないとしたか考えられない内容であった。

ステイヤーとは距離2400m以上で活躍するウマ娘を指すが、スプリンターは

距離1200mの短距離に対応するウマ娘を表す。

見ての通りスタミナ特化のステイヤーとスピード特化のスプリンターでは必要な適正が正反対である。

全く正反対の適正を持つウマ娘など、スカレットはおろかホワイトグリントが現れるまでタキオンすら空想上の産物としか考えていなかった。

「彼女の身体のコールドを調べているけど、まだまだ途中さ。例えば、QBの高負荷に脚が耐えきれない理由は？スプリンターの筋肉の付き方で桁違いのスタミナがある理由は？運動強度と呼吸量が何故比例しないのか？一部例を上げただけでもこんなにある。」

「タキオン、後で現状の資料とレースのデータが欲しい。今後のスケジュールに必要なからな。」

「ああ勿論分かっているとも。ところで学園に戻ったらケーキを用意してくれたまえ。その代わりにデータの整理はしてあげよう。」

タキオンの条件に仕方ないとばかりokを出した沖野トレーナーに、スズカが不安そうな面持ちで沖野トレーナーに声を掛ける。

「トレーナーさん。スペシャルウィークさんが勝つ方法はありますか？」

スペシャルウィークと同室のスズカは、部屋の中で転入した理由やそれまでの経緯を知っているからこそ、スペシャルウィークに勝って欲しいと思っていた。

なんとなくスペシャルウィークとスズカの関係を察した沖野トレーナーは、スペシャルウィークにとって都合の良い状況が発生した状況で想像した場合、何度考え直して同じ結論に行き当たった。

結論がスズカにとって良くないものであっても。

「スペシャルウィークには申し訳ないが、十中八九ホワイトグリンツの勝つだろう。」

『各ウマ娘、ゲートに入り出走準備が整いました。』

スタート前の放送が流れた事により、会話を中止し全員の意識がゲートへと向かう。

そしてカシャンと音を立てて全てのゲートが開き、飛び出しが一番早いホワイトグリンツから若干出遅れたスペシャルウィークまで、14人のウマ娘が一斉に飛び出す。

『さあ一斉にスタートだ！おっと、少しバラついたスタートか。』

スタートしたウマ娘達はそれぞれの脚質に合わせて位置が大きく変化し、順調にレースは進む。

『まず先頭争いをする9番のセラクール、4番のビクトリーワイルドだ。そして内からは2番ナツノセンチュリー、おっとスタートで出遅れた14番スペシャルウィークは5番手だ。2バ身離れて13番クインベレー、ここまですでで先行集団を形成しています。』

「スペ先輩は先方の位置ね。」

スペシャルウィークの位置を確認したスカレットはそう口に出す。

「あれ？グリント先輩は何処に？」

ウオッカの言葉と同時にスピカの面々がスペシャルウィークの周囲を見回したが、ホワイトグリントの姿は何処にも見えなかった。

「おい、彼処だ！」

声を張り上げてゴールドシップが指を指したが、ホワイトグリントの現在地に悲鳴に近い驚愕の声を上げた。

「嘘ッ！」

「このレースは1600mしか無いのにあの位置!？」

『続いて1番ミニコスモス、内8番キズナワン、後方に12番ソルトセンコウ、10番カベルネ、1バ身差3番ステラハント、外から7番ウエノリマイン、そのまた外から5番ロイヤルコロネット、内に11番クールマ、そして最後方は6番ホワイトグリント、後方に居るウマ娘は距離的に少し厳しいか?』

『おや? ホワイトグリント、独特な走り方ですね。』

『私も初めての見るフォームです。パドックでも示された常識に囚われないスタンスは吉と出るか凶と出るか。』

ホワイトグリントの特異な走りを見た後、再び先頭へ目を動かし実況が流れる。『先頭変わらず9番セラクール、後方4番ビクトリーワールド、その後に2番ナツノセンチュリー、1バ身離れて14番スペシャルウィーク。』

『おや? クインベレーが様子を伺っておりますね。そろそろ仕掛けて来そうです。』  
解説の後、クインベレーが加速してスペシャルウィークに接触するが、パワーの差でスペシャルウィークが軽く弾かれる。

転倒したりは無いものの、フォームが一瞬崩れたことによりスペシャルウィークは若干減速して間が開く。

『クインベレーがスペシャルウィークを弾き飛ばした！力強い走りです。』

『強靱なパワーが持ち味ですからね。』

『アームレスリングで負け無しだそうですよ。』

解説と実況がクインベレーについて話している間に、レースは着々と進行する。

『第3コーナを通過、残り600mだ。現在ハナを進むのは9番セラクル。』

そしてその時、走行中のクインベレーから蹄鉄シューズに付いた芝と土がスペシャルウィークの元へ飛ぶが、咄嗟に体を傾け華麗に回避する。

何度も飛んでくる土を回避するスペシャルウィークに沖野トレーナーが関心してレースの様子を眺めた。

「上手く避けるな。」

「お母ちゃんとの練習の成果ね。」

「お母ちゃん？」

スズカが口にしたお母ちゃんとの練習に疑問が浮かび、沖野トレーナーがスズカ

に視線を下げるが、レースに集中しているスズカを見て再び視線を元に戻した。

『さあ第4コーナーを廻り、残り400mだ。おおっとクインベレーが仕掛けて一気に先頭へ。』

スピードを上げ、先頭三人を軽々抜き去るクインベレーに盛り上がった観客の歓声が立ち上る。

『最初に最終直線に入ったのはクインベレーだ!』

そしてゴール手前の直線になった時、スペシャルウィークもスパートを掛ける。減速した前方のウマ娘達を抜き去り、クインベレーの隣まで巻き上げる。

『クインベレーとスペシャルウィーク、二人のデッドヒート!』

ほぼ同位置に存在する二人は、素早く呼吸を何度も繰り返し、相手を追い抜かそうと脚の回転を早める。

片方が加速すればもう一人も速度を上げ、一騎打ちの様相を呈していた。

『これはクインベレーが僅かに優勢か? スペシャルウィークの速度を上げて再び並んだ!』

当然二人はお互いに全ての意識を向け、それぞれの願いや思いを叶える為、賢明

に相手より早くゴールしようとして強く一步を踏み出す。

二人の独断場と化したレース場は、観客や実況者の意識がほぼ全て集中していたからそこ、気づくのが遅れた。

死神は気を抜いた瞬間に首を搔つ攫って行くと言う事を。

『あついや、いつの間に！二人の後方、大外なら上がってきたのはホワイトグリンント！凄まじい末脚だ！』

先頭争いをしていた二人が気づき意識を向けた頃には、白き閃光は既に左前を走っていた。

『残り200m、二人を追い抜かして先頭を取り返したのはホワイトグリンント！リードは1バ身！』

スペシャルウィークはホワイトグリンントの出現に一瞬呆気を取られたものの、目の前に迫るゴール板でやる事を思い出し、火事場のバ鹿力とばかりに増速してホワイトグリンントの背中を追う。

『先頭は以前変わらずホワイトグリンント！しかしスペシャルウィークの追い縋る。』少しづつ、少しづつ近づくと背中中に希望を持って懸命に走るが、ホワイトグリンント

がQBで加速した途端、その希望は崩れた。

『今ゴールイン!』

ゴールラインをホワイトグリントが最初に通過した後、スペシャルウィークとクインベレーの順でくぐる。

『勝ったのはホワイトグリント、何という大番狂わせだ!見事、デビュー戦を制しました!』

既に二人の先頭争いで盛り上がっていた観客達は、颯爽と追い抜いたホワイトグリントへ大きな歓声を上げ、勝者を称えた。

「これはこれは・・・スペシャルウィーク君には悪いが、良いデータが取れたよ。」  
大変興味深そうにタキオンは、レースの優勝者へ視線を合わせる。

しかしタキオンは興奮が落ち着かないようで、耳がピコピコと動く。

「それにまだ余力を残しているようだよ。全力を出さず、マイルの短い距離とは言え、ゴール直後の息切れも殆どないとは・・・やっぱり面白い。」

「スペシャルウィークも仕掛けるタイミングはほぼ完璧だった。加速も良かったが、如何せん相手が悪すぎる。」

スペシャルウィークの敗因は、  
沖野トレーナーのこの一言に纏められていた。

# 砂時計の白き閃光

---

著者 弓風

発行日 2022年10月23日

ハーメルン-SS・小説投稿サイト-  
<https://syosetu.org/novel/276197/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。

---